

自己肯定感を高める

ー 算数科における身に付けさせたい資質・能力に着眼して ー

学籍番号 249348

氏 名 濱崎 徹

主指導教員 貞末 岳

副指導教員 東尾 晃世

1. 背景

1.1 主題設定の理由

現在、日本では、自己肯定感の低い子どもが多いと言われている。平成26年度 高校生の生活と意識に関する調査（独立行政法人国立青少年教育振興機構）において、日本の子どもたちの自己肯定感に関する質問項目（「人並みの能力がある」、「ダメな人間だと思ふことがある」「私は、自分自身に満足している」）は諸外国に比べ低い状況という結果が出ている。一方で、『自己肯定感が低いことが、他者との比較の中で、過度に「自分に自信が無い状況」や「自分を無価値な存在だと感じる」との表れである可能性もあり、この観点からは、

- ・日本従来の特徴、良さである「他者との関係の中での自己」としての「自己有用感」、
- ・「自己評価・自己受容」としての「長所」や「挑戦心」、
- ・「自己主張・自己決定」としての「主張性」

といった意識をバランス良く育み、子供たちの自己肯定感を高めていくことが重要である。』という考察も出されている。また、いじめ、不登校、その他の問題行動、コロナ渦における人間関係づくりの経験不足によるもの、学習に関する不安や学習環境の未整備などが、自己肯定感の低さと関連しているとも考えられる。

1.2 研究の仮説

学校実習において、算数の授業実践を通して、「自己肯定感を高める」という課題を追究していくこととした。そこで、以下の2つの仮説を設定することにした。

- ①算数の授業実践において、ヒントカードの提示やペア学習などを通して、「できる」「わかる」と感じる機会を多く設定することで、児童の自己肯定感を高めることができるのではないかと。
- ②児童自身が自らの学習状況を把握し、自らの次のめあてに向かって学習を進めることの積み重ねによって、自己肯定感を高めることができるのではないかと。

2. 研究実践の構想と方法

本研究では、算数の時間を通して、自己肯定感を高められる手立てを行う。その手立ては、以下の4点である。

- 1点目は、授業の始めには、ペア学習による前時の学習内容の交流時間を設けることである。

2点目は、授業内で本時のめあてを明確に提示し、児童にとって「できた」「わかった」を実感しやすいように工夫を行うことである。同時に「わからない」「難しい」などの気持ちも大切にし、それを乗り越えられるような、指導者のサポートについても追求していく。

3点目は、問題解決的な学習を行う際に、手持無沙汰になっている児童や、何をどうすればいいのかわからない児童に対しての「ヒントカード」の開発も行うことである。

4点目は、各授業の最後には、ふりかえりを書く時間を確保し、どのような視点で記述すればよいのかを、学習時に児童と確認を行う。ふりかえりの文を書く際には、OPP (One Page Portfolio) シートを活用し、児童自身が学習単位を通して、学習の変容が可視化できるようにする。

また、単元末には、学習に関するアンケート調査を行う。

3. 授業実践

実習校で独自に行っている算数アンケート、キャリアパスポートの「自分のよさを見つけられましたか」の結果を踏まえ、2025年6月に小学校第4学年において『小数のしくみを調べよう』の単元を、2025年11月に小学校第3学年において『数の表し方やしくみを調べよう』の単元の授業実践を行った。2024年11月にも小学校第3学年において、同単元の一部（第1時から第8時）の実践を行ったことも踏まえ、考察を進めた。

4. 成果と課題

4.1 主題研究の成果

自己肯定感を高めるために、実践した4つの手立て（①授業の始めに、前時までの復習をペアで行う時間をとること ②学習の流れを視覚化すること ③問題解決学習をする場合には、ヒントカードによる支援を行うこと ④OPP シートによる振り返りの記入を行うこと）を行うことで、児童自身が学習のめあてに迫ることができたこと、自己肯定感に関連する、学習に対する自尊感情や自己有用感を意識できつつあることである。また、わからないことがあっても、調べたり聞いたりすることで解決できることを、身をもって感じることができ、前向きに学習に取り組む姿が見られたことも一定の成果があったのではないかと考える。他にも、学習の自己調整もできるようになることで、児童自身が次の学習のめあてをもつことができつつある。

4.2 今後の課題

以下の2点が、課題として挙げられる。

1点目は、自己肯定感を高めることは、数字による分析が難しく、即効性がないことである。一時的には効果があるかもしれないが、児童が本当の意味で自己肯定感を高めるためには、特定の教科等の教育活動にとどまらず、全教育活動による取り組みが必要である。

2点目は、授業力の向上である。児童が「わかった」「できた」と感じられるような授業づくりや必要に応じた支援方法を追究していく必要がある。また、児童の声にも耳を傾け、適切な信頼関係づくりによって、少しずつ変化していくと予想されるので、邁進していきたい。